

歴史的事実を直視して

金賛汀（キムチャンジョン）

ご紹介いただきましたキムチャンジョンです。私は主に、在日朝鮮人の立場から在日朝鮮人問題を研究・執筆して参りました作家です。ただ在日朝鮮人問題だけを発表するのではなく、その他にも教育関係の本だとか、そういうものもたくさん書いて参ったのですが、専攻は在日朝鮮人史、そしてまた近代日朝関係史です。そういう立場から、今問題になっている「自由主義史観」の立場の人びとが主張されるいくつかの問題について話してみたいと思います。

渡部昇一先生だとか、藤岡先生が、いろんなことを言っておられるのですが、私たち日朝関係史を専攻しているとか、あるいは在日朝鮮人史を研究しているとか、近代日本史を研究しているとかという専門家の間では、

今まで彼らに対してまともに論争をしようとする人たちはほとんどいませんでした。彼らの主張が愚か過ぎて専門家としてまともに取りあげるのも馬鹿馬鹿しく恥かしくて論争できないというのが、その本音だったと思います。

昨日、私は大阪にいたのですが、大阪では朝鮮近代経済史、韓国経済史を専攻しておられる滝沢さんと言われる大学の先生と話したのですが、彼はああいう人たちと論争をするというのは、専門家としてはなんとも恥ずかしいと言われるのです。全然学問的レベルではないところで論争しなければいけないので、自分の研究が汚されるような気がして話したくもない、だから彼らの主張をまともに取り上げて来なかつたけれども、あれがいけない

いのかなという話になりました。

それは私もまったく同じ思いで、あの先生たちが言っておられることがまともじゃない、事実じゃないということ、いずれ、皆が知っていることだからとほとんど相手にしなかったと言うんでしょうか、そういうことがずっと続いて参りました。

ただ最近、去年あたりから、これではいけないのではないかということ、私個人としては非常に強く感じるようになりました。というのは、たとえば今日も会場の売店で本を売っておりますけれども、そこに私の書きました『浮島丸、釜山港へ帰らず』という本があります。

これはエイジアン・ブルーという映画になりましたが、その映画は、強制連行された人たちが朝鮮に帰る途中で爆沈された帰還船の話なんです。その映画を全国の学校で上映する運動が起きました、強制連行なんてなかったと上映に反対する人がいるということで、学校でなかなか上映させてくれなくなりました。学校としては、そのように主張する人がいるからと上映をしません。反対意見のあるものは、話がややこしくなるからやらないというのが行政などの姿勢です。そういうことで、どんな身近なところに影響が出てきたのです。そんなこともあって、きちんと反論はしておかなくてはいけないので

はないだろうかということを、最近、強く感じております。

今日は渡部昇一さんの、『国益の立場から』という、二年前に書かれた本でそこ言っておられることが、本当に正しいのかどうかということを、皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

たとえば、朝鮮の独立問題です。植民地時代に朝鮮の独立問題を朝鮮人がどう考えているのかというところで、渡辺さんは、次のように言うておられます。「日韓併合がイヤでイヤでたまらなかつたなら、どうして独立運動を展開しなかつたのでしょうか。コーリアンには命をかけてまで日本から独立を勝ち取りたいと願ひ、行動する人は、独りもいませんでした。日韓併合を不満と想っている人はいないということ、こういふふうにかかれてます。みなさん、この主張をどう思われますか。

日本の近代史についての学習は、日本の学校教育の中で不足していると思いますが、朝鮮人は、本当に独立するために命をかけて闘った人が一人もいないんです、が、少しでも日本近代史を学んだ人だったら、言えるかどうか。たとえば学校教育の日本史、日本近代史の中でも、朝鮮との関係で触れている個所で、独立のために闘った朝鮮人たちの話は数多くあります。例えば三・一

独立運動もそうです。何百万人もの朝鮮人が運動に参加し、何千人もの人が殺された。それなのに、一人も生命をかけて闘った人はいなかったと言いつける。言いつ切つて、そしてそれを一転させて、だから日韓併合は、朝鮮人は誰も反対していないんだ。賛成していったんだと強弁する。これは完全に史実に反します。

この日韓併合に対する反対、それから朝鮮の独立に対する思いと戦いというのは、日韓併合以降朝鮮人の一貫した、一九四五年八月一五日まで一貫した願いであり、行動原理だったのです。

たとえば、すでにその闘争が始まっているのは一九〇五年に日本がいわゆる韓国を保護国にした時からです。

日韓保護条約以降、独立への闘いは開始されています。日本が朝鮮を保護国にした時に、何をしたかと言いますと、外交権と軍事権を、当時の大韓帝国から取り上げて、日本がそれを代行するということです。だから外交権は一つもなくなりませんし、それから軍事権も取り上げて、大韓帝国の軍隊を解散させてしまっています。強制的に解散させられた軍隊が中心になって、民衆と連帯して反乱を起こします。これは義兵闘争と言うんですがそれが一九〇七年から始まります。これは非常に激しい戦いで朝鮮全土で義兵闘争が起こります。この闘いは、いわゆる保

護条約に対する反対と、それからその後、一九一〇年に日韓が併合されますが、その併合に対する反対として続きます。

その闘争は一九〇七年、八年、九年ぐらいつまでが最高潮で、ものすごく激しい戦いが全土で繰り広げられるのですが、日本軍はご承知のように、その時期にはすでに近代化された軍隊と武器を持っておりましたし、それに対して朝鮮はまだ、非常に旧式の鉄砲と、それから槍だとか刀が主流という原始的な武器での戦いです。だから戦いはほとんど一方的に日本軍の勝利になります。それでも抵抗は止みません。その闘いで殺された人たちは、大変な数になっています。

この時のいわゆる義兵闘争については、『朝鮮暴徒討伐誌』という報告書が一九一三（大正二）年に日本帝国陸軍の朝鮮駐軍司令部から出ております。こんなに厚い本です。これを読んでみられたら、どこでどれだけの人が、どれだけ多く殺されたか、どれだけの人がどどこで闘つて、どういう人たちが死んで行ったかということが、非常に詳しくわかります。

その最後の結びの中で次のように、書かれています。

「明治三十九年三月以降、四四年六月に至る間における討伐公簿に記入したる暴徒の損傷は、死者一万七六六九人、

負傷者三七〇六人、捕虜二九三九人を算し、その他檢挙により、または自主帰順せる暴徒の数、甚大なり」。少なくとも、この間、一万七六六九人という人が死んでいるのです。このような事実を知っていたら朝鮮人は一人も命をかけて闘ったことがないなんていう暴論が、あるいはウソが、どうして言えるのか。僕なんかは、渡辺昇一さんの『国益の立場から』というその本のこの文章を読んだだけで啞然としてしまったんです。多くの激しい独立運動があったことは、近代朝鮮史を勉強した人たちにとっては常識なんです。

『朝鮮暴徒討伐誌』というような、近代朝鮮史の専門家が読んだら誰でも知っているような専門書で日本帝国陸軍が報告している文章に全然目を通さないで、こういうことを言う人たちの言葉。そういうものに対する嫌悪感のようなものがあって、こんな連中とまともに論じあっても仕方がないという思いは専門家なら専門家ほどあるでしょう。

朝鮮史、あるいは朝鮮近代史をやっておられる方、研究者の中には、日本には近代に入ってから、日清、日露戦争、それ以外に日朝戦争もあったというふうに定義してもいいんじゃないかとおっしゃる方もおられます。この日朝戦争というのは、今話した義兵闘争のことです。

そのぐらい激しく、多くの戦いが朝鮮の独立をめぐる行われているのです。だから、一人も命をかけて闘ったコーリアンはいなかったなんていうような暴論が、決して許されるはずのものではありません。

それともう一つ、この義兵闘争の特徴は、ゲリラ戦です。朝鮮人義兵部隊は二〇名とか三〇名とか、四〇名とか、多くても二〇〇名ぐらいの、いわゆる独立ゲリラ闘争です。そんな小部隊で日本軍に向かって戦いを挑むのですが、正規軍との闘いであるだけに非常に熾烈だということでした。たとえば討伐誌の中に書いてあるのは、三〇名のいわゆる少数の蜂起に対して、日本兵が襲いかかり、三〇名の小部隊だと死者が二〇名ぐらい出る。だから言ってしまうえば、闘った人たちというのは、ほとんど皆殺しの状態になっているのです。それぐらい激しい抵抗運動があった。こういふ激しい抵抗運動があったからこそ、それに対する弾圧が厳しくなり、そしてそれこそ後に中国大陸で行われる日本の三光作戦と同じような、殺し尽くす、焼き尽くす、奪い尽くすというやつですね。そういう三光作戦と同じような戦闘が、一九〇七年から一〇年までの間に、朝鮮では行われていた。

そのことによって、一九一〇年、日本が朝鮮を併合した時に、抵抗するものは、ほとんど武力で鎮圧し、弾圧

してしまっていたので、情況としては一見平和的に併合がなされたように見えたのです。そんな弾圧、鎮圧のため朝鮮における併合は、いわゆる暴発をみないで、そのまま進行されていくというような状況があったのです。それだけ、併合にいたるまでの、この激しい抵抗というのは、ものすごいものがありません。

そして併合後もそれは続きます。ご承知のように一九一九年には、朝鮮全体を揺るがした三・一独立運動が起きます。これは東京の留学生が最初に蜂火をあげました。彼らは独立宣言を二月八日に東京で行います。東京で朝鮮独立運動のための集会を持ち、朝鮮独立万歳を叫んで、会合を持ち、国会議員や、各国の大使館に手紙を出して陳情を行っています。これがそのまま朝鮮本土に飛び火して、三月一日、ソウルのパゴダ公園で、独立宣言がなされ独立運動が起こります。三・一独立運動または三・一独立闘争と呼ばれています。この三・一独立運動は、朝鮮全土にアツという間に広がりました。だいたい二〇〇万人の人が参加したのではないかと言われています。その朝鮮独立運動で、どのぐらいの人が死んだのか、どのぐらいの人が逮捕されたのか、正確な調査報告書はありません。断片的な軍や警察の報告書はありますが全体の報告書はありません。日本政府はわざと作らなかつた

と思うんです。日本政府は、自分の都合の悪いことに対しては、調査報告書というものを全然作らないのです。

三・一独立運動もそうですし、それから後におこる関東大震災の時の朝鮮人虐殺にしてもそうです。従軍慰安婦問題でも、またしかりです。南京の大虐殺事件も報告書調査書はありません。そういう自分の都合の悪いことは、まったく調査しないで、うやむやにしようという形で処理してきたのが戦前の日本政府の姿勢です。

資料を残さず調査を隠すようにした結果が、渡部さんのおっしゃるように、朝鮮人は朝鮮の独立のために、一人も命をかけて闘ったことがないんだとかいう勝手な暴論が吐ける温床にもなっていると思うんです。

そういうきちんとした根拠なしの主観的、独善的主張といい加減さというのは、いわゆる自由主義史観を唱えておられる人たちの基本的な姿勢だと思えます。

もう少し、こういう、いくつかの事例を見て行きたいと思うんですが、独立運動に関して言えば、一九一九年の三・一独立運動以降にいくつも起こっております。

一九二六年には、万歳闘争が起こっております。これは李朝最後の王様、高宗の死を悼む朝鮮人が、その気持を朝鮮の独立に向けて蜂起して示した運動です。一九三一年には、光州の学生運動が起こっております。これも中

学生たちを中心に朝鮮の解放を要求し全土に広がった運動で、それこそ何千人という死傷者を出しております。

だから一九四五年八月一五日まで、朝鮮人にとっては、独立問題というのは、民族の最大の願いであり、そのために命をかける人はいくらでもいた。それこそ何十万という人たちが、そのためにいろんな形態の運動をし、投獄を強いられ、あるいは殺されたりしているのです。

歴史的事実から言えば併合は朝鮮人が喜んでいる。それは独立運動をする人が一人もいなかったことからわかるだろうなんていう言い方は、何の根拠もない目茶苦茶な主張で、これは朝鮮人だったら、誰でも怒るような暴論です。そういうことじゃなく、現実はいろんなところで独立闘争が繰り広げられているのです。そのことを、日本人たちは、あまりよく知らないできました。そして、渡辺さんたちはそれをいいことにうそを言い続けているのです。

さらに渡部さんは、この本の中で、「日韓併合は韓国にとっても遺憾なことでしたが、日本にとっても大変なことでした。大覚悟をして行ったこととはいえ、やはり大変な財政的負担になったのです。はっきりと言えば、当時の朝鮮半島には資本の貯蓄などまるでなかった。それは台湾、満州についても言えます。そのために、日本

は歯を食いしばって、それぞれの地に大規模な投資を行い、さまざまなインフラを整備したのです」と主張されています。

朝鮮の植民地支配を合法化される方、それを正当化される方の論拠の中に、日本は朝鮮にいいことをたくさんしたんだという主張があります。それらは主に社会設備、いわゆるインフラの問題ですね。日本は朝鮮の近代化のために社会的設備をたくさん整えたんだということを話される方がおります。鉄道を作ったんだとか、港湾を作ったんだとか、大規模な水力発電所も作ったじゃないかというような話をされて、それがあたかも朝鮮人のために作られたかのような論拠のすりかえが行われています。これを作った目的は朝鮮人のために建設したんじゃないんです。言ってしまうえば、日本がそこで、朝鮮の地で、どれだけ最大限の収奪ができるかということを目的にして行われた投資です。鉄道は、朝鮮人の人たちの便のために作ったのではないのです。軍隊の移動、またたくさん資源を運び出すために、そして商品の流通のために鉄道が作られた。それだけのことなんです、それがあたかも朝鮮人のためになされたというような言い方になっていく。これはどこの国でも、西欧列強の植民地支配もそうなのですが、その国をよくしてやるために他国

の植民地支配を計った国は、ひとつもありません。日本もそうです。当たり前のことなんです。植民地支配というのは、その国から、その支配した国から、どれだけ最大限に収奪できるかということを最大の目的にしています。

そのやり方は帝国主義国によっていろいろ違います。また支配したそれぞれの国の国情によって違ってくるし、またその国の財政的規模によっても違ってくるでしょう。だからやり方はさまざまです。ただ言えることは、その植民地支配された国というのは、ここで渡部さんが言っておられるように、どこも資本的蓄積なんかはない国です。そうすると資本的蓄積がない国では、収奪は行われないで、一方的に支配国の財政的な負担になるのかと言えどそんなことはありません。そんなことのために、植民地支配しようとする国なんてないのです。

資本的蓄積がなくても収奪することは、いくらでも可能で、何が可能なのか。ひとつは土地を収奪できます。大規模なのは、いわゆる西洋列強がどこでもやったことですが、いろんな金になる農作物を作ることです。ゴム園、コーヒー園などですね。そういう土地の収奪ができます。それから植民地の人たちにいろんな税金をかけて収奪することもできます。それから鉱山資源などの開発

も、これもどんどんやって行きます。それから、そこを市場にして、日本の商品を売ることもできます。これらは全部、日本は朝鮮でやりました。日本の利益のために歯をくいしばって、それこそ一所懸命にやりとげました。そして収奪していったのです。

日本が朝鮮人のために歯をくいしばったんじゃないんです。歯をくいしばったとするならば、それは日本人の利益のために歯を食いしばったのです。

朝鮮における日本の、土地の略奪から話をしましょう。朝鮮の土地の収奪が最初に始まったのは、一九〇七年ぐらいから始まっています。一九〇五年に保護条約締結された、その時設置された韓国統監府は一九〇七年には、いろんな名目での韓国帝室の、いわゆる財産整理ということを行っていきます。その中に、旧李朝鮮が政府の保有物として持っていた土地、たとえば官吏のために――昔は給料と言っても土地から上がる農作物で払っていたものですから――土地をたくさん持っているのです。その土地を全部取り上げてしまいます。取り上げて日本の地主、あるいは東洋拓殖という植民地経営のための国策会社に払い下げています。ちなみにこの東洋拓殖の大株主は、日本の皇室です。

それから一九一〇年に朝鮮の植民地支配した時には、

すぐに土地調査事業というものを開始しました。その土地調査事業は、土地の所有権がどのようになっているのかということ調査するということと土地の価格の調査とそれから地形などの調査ということが目的だと書かれています。しかし本当の目的は、そういうことじゃないんです。実際の目的は、どうしたらより多く税金を取り上げることができるかということです。どうして土地の調査と税金が結びつくのかと言いますと、朝鮮はその当時、土地の所有関係ではまだ半分ぐらい封建的な所有関係が保持されておりまして、土地の登記なんかも、近代的な形で個人個人の登記がきちんとなされておりません。だから実際は農地があつて、そこで農耕する人がいても、その農地が村のものであつたり、一つの行政単位を面と言いますが、面のものであつたり、里のものであつたり、あるいは郡のものであつたり、そういう公共のものである場合が非常に多いです。そのあたりの土地の所有権がきちんと確立していないと、土地所有を基本にして個人に税金がかけられないんです。不特定多数に税金をかけるわけにいきません。農民から収奪するための方法として、日本政府は土地の所有関係をはっきりさせておこうとしました。だから誰が、どれだけ土地を持っているということを引きとをきちんと登記させる。登記させて、一〇〇坪

持っている人には、何千円、一〇〇〇坪持っている人には何万円という数量で現れる税金のかけかたをします。言つてしまえば、近代的な税法ですが、そういう税金をかけることができるということでの土地調査事業なんです。それを実施しました。

調査事業で、誰がどれだけ土地を持っているかということが最大の問題になるところなんです。その所有地の確認を申告制にしたんです。私の土地はこれだけありますということと土地の所有者が、朝鮮総督府に申告していく。そうすると、先程言いましたような入会権、村や人びとの共同の土地のようなものは、申告する人が出てこない。自分の土地じゃないから、自分のものだけと言えないのです。そうすると、どうなるか。これは無主地主人のない、所有者のいない土地ということで、全部取り上げました。その取り上げた土地を、さきほど言いましたような東洋拓殖だとか、日本の地主だとかに安く払い下げを行つております。

そんな方法でなされた、その土地調査事業が一九一八年に終わりました。その時には、全農民の三％に満たない日本人と朝鮮人の地主が、全耕作地の五〇％、水田の六四％を所有するという、ものすごいいびつな農地の所有関係が確立します。これなんかは、それこそ朝鮮人の

ために齒をくいしばって、土地調査事業をやってくれたのかと言えば、そんなことじゃないのです。明らかに日本人が朝鮮人の土地を取り上げるために、齒をくいしばって土地調査事業を行った。植民地支配の初期の目的を、そういう形で達成しているのです。

朝鮮の近代化のため設備、インフラの話を、同じ農業の問題とするなら、水利施設の問題があります。一九一八年に、日本で米騒動が起こります。ご承知のように、富山県魚津あたりの、漁師のおかみさんたちが、食べる米がない米よこせと運動をおこしたところから始まった米騒動です。日本全土に広がりました。しかし日本政府は、この米騒動を非常に恐れました。ちょうどロシア革命が成立したばかりの時、日本の中に社会主義革命のようなものが、それによって触発されるようなことを、どんなことがあっても防がなければいけないと考えていました。

そのためには、労働者や庶民たちに対して、飢をしのげるだけの安い米を提供する必要がある。どうしてそれを実現するのかということになれば、これはどこかで米を作って持つて来るより方策がない。そこで、最初に思いついたのが、やはり朝鮮です。朝鮮で、産米増殖計画というのが立てられます。これは朝鮮の農地、今ある水

田を、もったときちんと整備して、耕地を整地して、そして水利の便もよくすることで、二倍、三倍に米が作れるようにしようということなんです。一見、これは朝鮮人の農民のために、非常にいい話のように思えます。そのために、日本政府は確かに巨大な投資をしております。そのため水田で水利が便利になり、朝鮮の農村は水利面では近代的な農村に変わっていくような部分がありました。

しかし農民に、タダでそれを使わせるのかと言えば、そうではないんです。日本の政府は投資したお金を回収するため農民に水利負担を負わせました。水税というのを取りたてまして、その水を使うものには、全部税金を払わなければいけないということになりました。そうしますと、それで得をするのは、水利税負担に耐えることのできる大地主とか、大きな耕地を所有している農業会社などで、地主たちには非常にうまい話なんです。中小の農民たちにとっては、この水税が非常に負担になっていく。だからこの計画が始まった一九二〇年には、総耕地の五〇・八%が小作地だったんですが、この増殖計画が終わった一九三〇年にはその比率が五五・四%に増えています。そして小作農の比率は、全農民の三九・八%から四六・五%に増えています。

ということとは、中小の農民が水利税負担に耐えかねて土地を売らざるをえなくなつて、そしてそれを大地主が買っていったということです。中小の農民たちの中では大地主の小作人に転落していく人たちが増えていきました。だから水利設備の整備はなら多くの朝鮮の農民のためにはなっていない。さらにインフラは整備されたけれども、そこで作られた米は、朝鮮の人びとは食べられず日本に安い価格で輸出されています。日本人の労働者には安い米を提供することにはなりませんが、それは朝鮮人の農民たちの犠牲の上に成り立って来たということです。そういうことが、どうして齒をくいしばって、朝鮮人のためにインフラ整備をしたのだという結論になっていくのか、私には全然わからないのですが。渡辺さんはそうおっしゃっています。

それから、「自由主義史観」を主張される人びとたちがよく言われていることですが、太平洋戦争中の日本軍の中には日本軍兵士と同じ気持ちで闘った朝鮮兵がいたということを強調されます。渡部昇一さんは、『国益の立場から』という本でこういうふうにおっしゃっています。「日本帝国陸軍の中には、韓国人の将軍もいました。士官もいました。たくさん兵隊もいました。それらの将兵は無理やり徴兵されたわけではないのです。日本兵

になりたいという志願者が多く、競争率が四〇倍、八〇倍にもなっていたのが事実です。B、C級戦犯になった韓国人もいます。その人たちの遺書には、日本への恨みは一言もありません」と書いています。日本陸軍の中には、朝鮮人もたくさん兵士として参加していたし、その人びとは日本人と一緒に闘ったんだ。そのことを、彼らはひとつも恨みに思っていないし、率先して日本の兵士になりたいと志願して来たんだということです。まったくこんな暴論といおうか、目茶苦茶話をどうして言えるのか私はわかりません。

こういう言葉を聞かされると、何でこんなウソが本気で言えるのかと情けなくなりそうです。こんなことは、ちょっと勉強すれば、関係書籍・資料も多く出ていますし、いくらでも事実関係は明らかになることです。それが大学教授ともあろう人が、こんなことを平気で言える。どういう精神構造の人なんだろうと思うのです。

確かに日本陸軍には、朝鮮人の将軍がいました。李王朝の方です。日韓併合の功労者として李王朝の方がたは、皇族扱いです。日本の皇族は軍人になることが定められておりましたので、皇族扱いの李朝王族も軍人になっていきます。それで将軍になった方が李王朝の関係者におられます。それから、一人だけですが、両班出身の方で、

洪さんという方が陸軍中将でした。この方は、終戦の時に、南方総軍の兵站総監をやっておられました。中将です。非常な高い位です。しかしこれは野戦軍の將軍ではないのです。軍隊に食糧などを補給する兵站を担当していました。戦後、この人は戦犯に指名されます。なぜ戦犯になったかと言うと、兵站総監として、捕虜收容所に十分な食料を供給しなかったという理由で、そのことが罪に問われて処刑されております。また、将校もたくさんというよりも、かなりの数の方が確かにおられます。一九四五年まで士官学校を卒業された人は約三〇〇人です。この方たちの、いわゆる出身は、だいたい日韓併合の時に、李王朝の方たちと一緒に、日本に併合することを推進された方たちのご家族です。朝鮮人は、それを親日派と呼んでおりますけれども、その親日派の出身者の方たちが多いのです。志願して、確かに陸軍士官学校に入っておられます。この方たちは、将校になっておられます。

しかし、先程言いましたように、洪中将以外には、誰ひとりとして陸軍大学まで進学した人はおりません。ご承知のように、旧陸軍は、陸軍大学を卒業しなければ、將軍になれませんので、朝鮮人の将校は最高で大佐止まりだということなんです。そういう日本人の下積みとし

ての朝鮮人将校はいましたけれども決して恵まれた存在でもなんでもないということであります。

それからもうひとつ、朝鮮人兵士は無理やりに徴兵されたのではなく、志願兵であったということをおっしゃっています。戦前のある時期まで朝鮮人は、徴兵をしないというのが、日本の徴兵令の規則だったので。なぜかと言いますと、言葉が分からないので、軍隊に入っても命令がきちんと伝わらなかったということが一つあります。だから言葉をきちんと話せない植民地兵は使わないということになりました。それと、いつ反乱をおこされるかわからないという恐怖もありました。それが一九三八年頃になりますと、中国での戦線が拡大してきて兵隊に必要な日本人の若者が激減しています。それと日本の教育がある程度朝鮮で普及し朝鮮の青少年に日本語を強要した結果、日本語をしゃべれる青年たちが多くなっていた。彼らの中から志願兵を取ろうということとで、一九三八年に、朝鮮特別志願兵令が発令されます。それで朝鮮の青年たちに軍隊に志願して入れと朝鮮総督府は大々的に宣言しました。小学校しか卒業していない人々に中等教育を受けられるとか、君たちは、天皇の赤子として、日本人とまったく同じに扱われるという宣伝をやりました。さまざまな特典を付与しました。それま

で貧困ゆえに学ぶこともできなかった青年達が、中学期度の教育が受けられるという、その宣伝を信じて軍に入ろうという人がかなり現れました。渡辺さんはそのことを言っておられるのかも知れません。しかし、きちんとした教育を受けた人々、その代表例が大学や専門学校の学生ですが、彼らは「志願」に反対しました。

朝鮮人学生にも一九四四年には、学徒志願兵制度が生まれます。これは朝鮮出身の学徒も、その志願令に一応適応されるということで実施されるのです。学生たちは完全な日本語をしゃべりますから専門学校、大学の学生たちに対する学徒志願令が施行されます。その時に、朝鮮人の学生の反応は冷たいもので、それは志願だから徴兵じゃないですから、行かなくてもいいんじゃないかと拒否する人が多くいました。その人たちに對して、日本の政府は、日本の本土の学校に入っていた専門学校生や大学生に対して、徹底的な、志願の強要を加えてきます。一番ひどいのは志願しない学生の退学処分です。もし志願しなければ退学に処すと脅かし、それでも志願しないと退学処分を行っています。それでも言うことを聞かない人たちの中には、牢獄に入れられた人たちもいます。これは一昨年の春だったと思いますが、立命館大学が、かつてそういう形で学校を追放された人たち、投獄

された人たちに對する謝罪を公式に出して、その人たちに對して卒業証書を授与する式典を、一般学生の前で行いました。これは立命館大学だけではなくて、日本の多くの学校で行われたことです。一番多く志願者を出したのは、明治大学と言われておりますが、それこそ日本中のあらゆる学校で、一万人に近い学徒兵が、強制的に召集されて行きます。

そして、朝鮮本国ではどうだったのか。朝鮮総督府は最初は日本兵と同じように、日本の学徒兵と同じように、いわゆる幹部候補生として、朝鮮人の学生の志願を募れば、彼らは喜んで来るだろうという思惑だったのです。大々的にそのことを宣伝して、四四年の一〇月二十九日に志願兵受付を開始します。しかしいざフタを開けてみると、全然志願してくる人がいないのです。

たとえば、当時、朝鮮における帝国大学は、京城帝大というのが一つしかありませんでした。ここはいわゆる親日派の人たちを中心に入学させていくという方針もあって親日派の人びとが多い大学ですが、それでも適格者八六名中九人しか志願していません。それから、一番ひどいのは、今の高麗大学ですが、専門学校と当時呼ばれていましたが、ここは二五七人中、わずか三名しか志願していません。それから、今の延世大学ですね。当時

のヨンギ専門学校でも、一四八名中、二五名しか志願していないんです。どうしてこれが四〇倍八〇倍の倍率の志願になると主張できるのか、よくわかりません。学徒志願兵募集の事実関係から言うと、まったく事実無根です。今挙げました数字は、一九四四年一月六日の朝鮮総督府の御用新聞と言われている京城日報に掲載された数字です。これらの数字、事実から日本の軍隊なんかに入りたくないと思っていた朝鮮人がいかに多いかということが一目瞭然ですね。

当時の学生の手記なんかを見ますと、朝鮮人の学生たちが、朝鮮総督府のそういう宣伝に対して、ざれ歌で返しているのです。「志願をするバカもいる」というざれ歌なんです。だから志願するということが、どれだけ愚かなこととということを朝鮮人側が言っているのです。さらに敗戦直前には多くの朝鮮人青年が強制的に徴兵されて従軍させられています。彼らは軍隊に行かなければ監獄に入れられるので嫌や嫌や入隊しています。それが喜んで志願したというような表現に、どうして変わっていくんでしょか。これは事実の歪曲だとか、そういうことじゃなくして、もう歪曲という言葉で言い表せないような目茶苦茶な話です。

それから、朝鮮人B、C級戦犯に対して、『国益の立

場から』では、朝鮮人戦犯が日本に対して恨みごとを一つも言っていた人はいないというようなことを、渡部さんはおっしゃっています。しかしこれは、やはり事実に戻します。『朝鮮人B・C級戦犯の記録』という本を、恵泉女子大の内海愛子さんという教授の方が、長い調査の末に書いておられます。これを読まればうらみつらみがどれほどのものか、おわかりいただけると思います。

たとえば、いわゆる戦犯として収容されて、巣鴨の戦犯収容所に収容された朝鮮人の一人は、こういうふうに言っています。「日本人の戦犯はまだいいです。県人会や家族の人たちが面会に来ては、いろいろ差し入れてくれます。品物じゃないのです。自分たちが忘れられていない。自分たちのことを見守ってくれる人たちがいるというだけで心強く、投げやりな気持ちになるのを押さええることができます。しかし私たちには訪れる人もいません。もちろん差し入れをしてくれる家族も同胞もいませんでした。日本人戦犯の人たちから差し入れられるタバコを分けてもらって、私たちで2等分、3等分しながら吸ったことがあります。そんな時のみじめな気持ち。見捨てられ、誰にもかえりみられない寂しい自分たちの存在を痛感しました」

日本の侵略戦争に加担し、日本兵として戦い、そして

戦犯になった人たちに対して、朝鮮人は非常に冷たかったのです。あいつらは、日本人と一緒に勝手に悪いことをやったんだ。なんでそんなやつを助ける必要があるんだというような気持ちです。そんなことでB、C級戦犯になった朝鮮人たちに対して、救援しようという声は誰からも上がらずに日も朝鮮本土の人も非常に冷たかったです。戦後補償の、いわゆる朝鮮人軍属、兵士たちに対する戦後補償の問題が、朝鮮人の中からなかなか世論として沸き上がらないのは、彼らはそういう日本の侵略兵の一兵として加担じゃないか、そんなやつになぜ私たちが手を貸してやらなければいけないのかという感情があるからです。

そんな朝鮮人の感情を承知しているから日本の軍隊に入り戦い、そしてB、C級戦犯になった人たちにとっては、本当にやりきれないものがあつたと思います。そういう時の心境を、またこういふうに言っておられる方もおられます。一九五二年に、巢鴨に収監されていた朝鮮人の戦犯と、それから台湾人の戦犯が、釈放要求を出して、裁判で争うことになりました。その時、日本人の弁護士で、私が引き受けようとして名乗り出た人がいるのです。その方が、朝鮮人戦犯に次のように言うのです。

「私は、三二、三年前、台湾の民生長官をしていた。当

時、台湾の兄弟分である朝鮮人を視察しなければならぬと思ひ、各所を視察しました。朝鮮では多くの人びとが、日本は朝鮮から搾取ばかりしていると思つて居るようだが、小鹿島に癩病(ママ)の收容所を建て、癩病(ママ)患者を收容したことがある。また、戦乱によって破壊されて困つて居るだらうということで、水力工事などをして、朝鮮の文化を推進せしめ、一〇〇〇万たらずの人口が増大し、二〇〇〇万に達した。あのまま放つておけば、文化も発展せず、人口も増加しなかつたであらう。私は朝鮮人の秘書を二人使用しているが、彼は非常に立派な人であつた。彼らの中の一人は、私が戦犯容疑になつたということを聞き、密航して来た。こういうわけで、朝鮮人とは因縁が深い。微力ながらも、諸君のために努力する」と、この弁護士さんは、いわゆる釈放運動を裁判で闘うということを戦犯の方に言われるのです。

その時弁護してもらつた人になつた人は、この申し入をどのように思つたのか。その思いを日記に書いています。「私の率直なる気持ちは、こういう考え方を持っている人の援助なら、望みたくもないし、受けたくもない。もしこのような人の援助がなければここから出られないならば、むしろ私は不自由であるが、この生活の継続を選ぶであらう。それが私のいつわらざる本心である。

実に彼の言葉はしゃくに触る。私はその場で反論することを遠慮したことを後悔している。今でも遅くないから、書面を持って抗議したいが、友達の意見もあり、一般の情勢から判断して、承諾するのやむなきに至る」そんなふうに日記に書いておられるのです。

これらの事実は、現在「自由主義史観」の立場に立っている方がおっしゃっている日本が朝鮮を支配していなければ朝鮮はめっちゃめっちゃになった、朝鮮を近代化し立派にしてやったんだというようなことを言う人に対して、日本の軍隊に入って戦い、B、C級戦犯として收容されている人たちは、そんなことを言う人の援助で私がここから出るぐらいならば、ここにそのまま收容されていた。そのほうが私の良心は痛まないというぐらい、痛切な思いを持っているのです。

このような事実がいくらでもあるのにどうしてこれが、うらみごとを言う人は一人もないという記述になるのでしょうか。

こんな話は他にも多くあります。巢鴨から釈放された後、北海道に行った人が、内海さんのインタビューに答えて、「俺には青春はなかった。戦争の中で生き、異国の北の果てに腰を落ちつけることになってしまった。黙って過去を振り返ってみると、本当に寂しいですね。

戦争をしていいことなんかありませんよ」というふうに言っているのです。

この言葉が、どうしてうらみごとに聞こえないのでしょうか。B、C級戦犯になった朝鮮人は、そのことに対してすごい自責の念というか、日本国家に動員されそこで日本兵とし闘ったことに対して、めっちゃめっちゃに自分を反省し日本の国を恨んでいるのです。そのことに対して、嫌悪感を感じているのです。

渡辺昇一さんの主張されているウソについて、もう一つ例を挙げます。教育問題です。学校教育制度は、「自由主義史観」の方たちの誰もが、朝鮮の日本支配により築かれた功績とおっしゃっておられるんですが、渡辺さんは「日本がたくさんの学校を作り、その学校によって、教育を徹底化させることによって、ハングルの読み書きが広まって行ったのです。うそだと思うなら、日韓併合以前、ハングルで書かれた文学の名に値する文学書や歴史書が一つでもあるかどうか調べてみなさい」。こうおっしゃってます。朝鮮の文学等については僕は調べるまでもなく知っているんですが。調べてみなさいと言われるので一応、調べてみました。

そして思いました。朝鮮の歴史に照らし合わせてこんなメチャメチャなことをおっしゃる方も、いるんだな

あ？どうしてそういうウソ八百が並べられるのかなと思いますね。まず教育制度の問題からいいますと朝鮮を植民地化した時に、日本が朝鮮の植民地支配の下で、学校教育をどのように実施するのかは、法律によって定められました。朝鮮総督府は一九一一年に朝鮮教育令という法律を発令します。その朝鮮教育令の中で、一番最初に言われているのは朝鮮人の教育の基本は「忠良なる国民を育成することを本義とする」とあります。言うまでもなく「忠良なる国民」というのは、帝国臣民にすることを本義とするということです。

それからもう一つは、国語を普及することを目的とするとあります。ここで言う国語というのは日本語のことです。朝鮮で日本語を普及することを目的とする。だから、渡部さんの言っておられるハンゲルを普及するなんていうことは、朝鮮総督はやっていない、反対に普及させないようになっているのです。この時代のハンゲルの普及というのは、植民地教育という日本政府の政策とは全然違った次元の問題で、朝鮮人側の自発的な活動として出て来ているのです。そのことは後ほど述べます。

学校教育を、日本が朝鮮でものごく普及させたいいうことを「自由主義史観」の方たちは一生懸命おっしゃいます。だからいいことをしたんだと。しかし、本当に

そうなのでしょいか。一九一九年当時の朝鮮の総人口は一七〇〇万です。そして朝鮮全土で小学校は、四八四校でした。これは普通学校と言いますが、初級教育です。学んでいた児童は八万四〇〇〇名ぐらいです。それからその時期に日本人が朝鮮にどのぐらいいたのかといいますと、在留日本人は三三万人です。その小学校が三九三校。児童数四万二〇〇〇名。三三万人の日本人のために作られた学校と一七〇〇万人の朝鮮人のために作られた学校数がほとんど変わらない。一九一九年といえば、植民地支配されてすでに一〇年たっています。これで朝鮮人のために多く学校を作ったと主張出来ますか？当時、多くの朝鮮人は、書堂と呼ばれる私立の寺子屋教育をうけていました。

それから中等教育ですが、当時朝鮮では高等普通学校と呼ばれていました。これは中学校のことですが、日本人の通う学校は中学校と言ったんですけれども、朝鮮人のためには、朝鮮高等普通学校と言いました。それはわずかに実業学校も含めて二八校しかないんです。そして朝鮮人の学生は三八〇〇人しかいませんでした。それなのに、日本人のための中学校、実業学校は一九校あって、生徒数は実に四七〇〇名に達している。朝鮮における学校教育制度は、まず、日本人居留民のために整備されま

した。それは言うまでもなく、日本の植民地支配を制度的に確保するための方策でした。朝鮮人のための教育はそのつけたしのようなものです。だから、圧倒的に日本人はたくさん高等教育を受けるような仕組みになっているのです。

当時の朝鮮の教育事情について話されている日本の有名な学者がいます。一九一九年に、先程言いました三・一独立運動が起こった時に、日本の新聞、日本の各界はこぞって、朝鮮人の暴徒が暴動を起こした、騒動を起こしているということで糾弾しました。それこそ、三・一独立運動に同情的であったり、あるいは朝鮮人の独立運動に対して、連帯を表明した日本人というのは、ほとんどいません。ほとんどと言うより絶無に近かった。そんな雰囲気の中で大正デモクラシーの担い手であった東京帝国大学の吉野作造先生が、ある雑誌で「朝鮮青年学生諸君」という連帯の挨拶を送ります。これが日本人として唯一残っている連帯の挨拶です。その吉野作造さんが著作の「朝鮮論」の中で、一九一九年の朝鮮の教育情況について、こういうふうに言っておられるのです。

「おそらく朝鮮全体における小学校の数は日本において、一番小さな県よりも少ないだろう。中学というものは、ほとんどないと言っても良い。学校の数が非常に少

ないのみならず、その程度がバカ（ママ）に低い。日本人に対しては、一人六〇〇円の補助を与え、どんな山間僻地でも学校を作る便宜がある。しかるに朝鮮人に対しては、この特典は与えない。のみならず、相当の費用を負担するかと言っても、朝鮮人の子弟（ママ）を、日本人のその学校には入れてくれない」ということを言っています。実情はそんなものです。

渡辺さんは、日本の朝鮮総督府が植民地支配のもとで、学校教育を普及したと主張されていますが、それは朝鮮人に対しては非常に差別的で、その上、その数も抑制し非常に少ないものでした。一九三五年に朝鮮総督府の教育実態についての統計がありますが、その時の朝鮮人学児の就学率は二割です。私はある執筆のために一九四〇年ぐらゐの時期の濟州島の教育について話を聞いたことがあります。大阪在住の濟州島出身の詩人で、金時鐘さんという非常に優れた人がおられます。その方に話を聞いていた時に、「一九四〇年当時、自分も濟州島にいたけれども、八人に一人ぐらゐしか小学校に行けなかったのではないか」とおっしゃっておられます。だから、学校教育を普及した、普及したと言いますが、これがいわゆる植民地教育の実態です。これらの数字は朝鮮総督府の統計からもしっかりしています。

ハングルの普及問題について話します。日本人が朝鮮でハングルを広めたという渡辺さんの主張ですが、それは事実に戻します。植民地支配時代、学校が少ないため正規の学校教育を受けられなかった朝鮮人は自分たちで、寺子屋、書堂（ソダン）と言いますが、これらをたくさん作って、そこでハングルなんかを勉強させました。この寺子屋も朝鮮総督府の規則によって非常に厳しく規制されていて朝鮮教育令の中の書堂規則というのを作り、朝鮮総督府が厳しく規制していきます。その規則では、いわゆる特定の宗教を教えてはいけません。それから国史、朝鮮史ですね。それについても教えてはいけません。朝鮮語ではなくて日本語を使用するようにとか。いろんなことを言っている条件をつけているのです。だから書堂も、だんだん減っていきます。併合当時二万近くあった書堂が、植民地の途中では半数以下に減っていくという状況があります。

だから学校教育を普及すると言うけれども、実際のところ、小学校の就学率が二割にしかならないので学びたい子どものための民間の寺子屋までハングル教育の温床になると陸止させていったという事実があるということに對する認識が渡辺さんには全然ないのです。多分、朝鮮近代教育史なんて学んだことがないのでしょうか。

それからもう一つ、朝鮮にいわゆるハングルで書かれたいわゆる文学の名に値する書物が一つでもあるかどうか、調べてくださいという話なんです。そんな文学書はたくさんあります。二〇〇〇年近い歴史を持つ国と民が、その国の言葉、その国民用語である言葉でもって、文学を作らないなんてことはありえません。どこの国だってそれだけの歴史があれば優れた文学はあります。日本だって、古い時代から平安朝時代からいろんな優れた文学作品が生まれておりますが、朝鮮でも生まれております。

たとえばハングルで書かれた文学ですが、今、私たちがハングルと言っている文字は、比較的新しい文字です。一四四六年に制定されています。これは李朝の四代目の国王であった世宗という方が作られたのですが、それまでは朝鮮では文字は全部漢文でものを書いていました。漢字を朝鮮語表記にして使っているのです。全て漢字で書いていくというやり方です。そんなこともあり文字は学ぶ時間と、生活にゆとりのある支配階級のものでした。両班たちのものです。だから庶民の間に、そういうむづかしい文字がなかなか浸透していかなかったものでこれはいけません、もっと簡単に覚えやすいものをとということ、現在の私たちがハングルと呼んでいる、ああいう文

字を世宗が発明されて、それを普及させていかれたのです。

ただ世宗の時代は、非常にそれを普及させたのですが、その反動が支配階級一両班たちですが一から起き、その後一時ハングルは衰退します。両班階級から言いますと、庶民がそういうものを、いわゆる文字を自由に操ることに對して、嫌悪感がある。自分たちの特権が、何か剝奪されるような思いがあるんでしょう。だから世宗が死亡した後、彼らの世界はまた、すぐ漢字に復帰していく。いわゆる公文書などは、全部漢字で書いていく。学者、支配階級、知識階級は、ほとんど漢字でものを書くというところが李朝の末期まで続きます。だからハングルは女性や庶民の文字になっていく。そういう背景もあってハングル文字が使われた学術論文、哲学歴史書などはほとんどありません。しかし、文学はいくらでもあります。私たちがよく知っているようなものでも、『春香伝』なんていうような物語りもあります。それから『沈清伝』もありますし、『興夫伝』もあります、『両班伝』なんかもあります。それはもう、実に多様なものが書かれます。『洪吉童伝』という物語りは、現在でもいろんな形で、おとなから子どもまで読めるような形で、いわゆる源氏物語がマンガになっていくような形で普及されてい

ます。『洪吉童伝』は、現在朝鮮で子どもなら誰でも読む愛読書の一冊になっています。

こんな朝鮮人なら誰でも知っているような事実に対して、文学の名前に値するようなものが、一つもないなんてことが、どうして言えるのでしょうか。こんなことを言っていますと、あきれかえられるだけでなく、朝鮮人から日本人というのは、なんにも知らないのに平気でウソを言う民族なのだなあということになってしまふ。どうしてそんなにウソを言えるんだらうなということになります。

事実関係から言っておきますと、これは先程、一番最初に話しました学者の方たちが、まともに取り上げて論争するのが恥ずかしいぐらいの主張です。だから話し合うのも馬鹿馬鹿しいから放っておくんだということになります。専門家の立場から言えば、まったくその通りです。彼らの主張を一つ一つ資料を挙げていけば、全部ウソだということがわかるようなものです。今、私が話した四つや五つぐらいのことでもそうです。そんな簡単なことは、近代日朝関係史を少し学習すれば、すぐわかることです。どこにでも資料があります。そんな難しい一級の資料ではありません。参考書もいくらでも出ています。

少し前に、渡部さんが書かれました、日本は中国、韓国に謝る必要がない。謝罪する必要がないという本が売れます。これも同じような内容なんです。こういう本が売れます。なぜ売れるのか。そのことで、昨日も先程の話をしました大阪の大学教授と話してみたいです。私たちががまとまな形で、きちんと事実関係を追求して、資料、出典をはっきりさせて書いた本というのは、なかなか売れないのに、なんでああいいうメチャメチャなことを書くて売れるんだらうという疑問というか、もどかしさを話し合いました。

本来、もしそういうでたらめを書けば、社会がその人を相手にしない社会ならば、そういう本は出て来ないのです。しかし日本社会では事実関係を重視するという姿勢が欠け、あいまいなままにしておく方が良いという国民的な精神構造があります。渡部さんは上智大学の教授ですね。藤岡さんは東京大学の教授ですね。このように、いわゆる一流大学と言われている大学の教授であっても専門は朝鮮史、日本近代史なんかと全然違う学者だということとはあまり問題にされず、大学教授が書かれたものだから、それ程間違っではないだろうと思われ、面白くないことと売れている。今まで言われていたこととだいぶ違うなという興味や関心もあるかも知れません。

それに、今まで中国や韓国から日本が悪いと言われることの反動でウソでも、謝罪する必要がない。いいことをしたのだと主張されれば、そちらに耳を貸したくなる。しかし、その基点にあるのは無知だと思います。というのは、戦後の教育の中で、ずっと受験競争との関連で言われてきたことですが、自分で考えることを要求してこなかったということ、日本現代史、近代史は受験であまり必要がないので学ばなかったという背景があります。

だから「自由主義史観」の人たちの主張のようなことを言えば、それはおかしいのではないかと指弾されるような日本の世論が形成されるためには、歴史的事実に依拠したそれなりの常識が社会の中に定着しなければならぬのです。そのような教育をやってこなかった結果が、今のような状況を生み出しているのではないだろうか。僕はそういうふうに考えております。

まだ他にも、従軍慰安婦問題とか戦後補償・戦後責任の問題も話したかったんですが、時間がありません。特に従軍慰安婦問題については、教科書に載ったことが問題になってから、「自由主義史観」を唱える人たちが、事実でないことをなぜ教科書に掲載するのかと発言したことが端緒になっていますので話したかったのですが、

時間がありませんので簡単に言います。

中国大陸には、いまだかつて従軍慰安婦であった朝鮮人たちが放置されたままになっています。またその慰安施設として使われた建物もまだ残っています。その慰安施設を第二次大戦中誰が管理していたのかということとその町の中国人人たちは、皆知っています。僕は一九八五年から中国を何回も訪ねて、それらの事実を確認していますが一九九二年には、ウーハン（武漢）へ訪ねて行きました。そうしたら、その地の中国人が日本軍があそこを管理していたんだよと言って慰安所であった建物を見せてくれました。そのような現実を皆知っているのに、そんなものはなかったとか、それは売春業者がやったんだとか、という言いっくろいほできません。はっきり日本の軍隊が、日本の軍人がそこを管理していたことを見ている中国人たちが現地には多数いるのです。

また、中国大陸には、日本が戦争で負けた時、日本人の軍人たちは帰国しました。それで彼らが管理していた、その従軍慰安婦の人たちはどうなったのかという問題が残ります。現地解散です。つまり、そこで放り出されたということですよ。そんな人びとの中には朝鮮にも帰れず中国に残っている人たちも、いまだにたくさんいます。その人たちの何人かにも会って来ました。そして彼女た

ちの話を聞いて来ました。そういう状況が、現に存在しているのです。現実にはそれらの問題があるにもかかわらず、そのことを否定するということは、どういうことなのだろうか。それを隠すことがどうして国益になるんだろうか。僕たちから言わせれば、事実は事実として、きちんと見据えながらでしか未来は開かれない、という思いがありますので、なんできちんと事実関係を確認して前進しないのだろう。そのことがいかに恥ずかしいことであっても、いかにおぞましいことであっても、きちんと事実を見据えて前進しなければ、また同じことを繰り返します。それを見据える時に初めて、そういう同じ誤ちが繰り返されないといいことです。そういう意味で、今、事実をねじ曲げて平気でウソを主張する人びとが横行する日本社会というのは、これからどういう方向に行くんだらうという恐ろしさを感じております。何としてこのような日本社会の流れは変えなければなりません。変えることがそれこそ「日本の国益」だと思えます。待ち時間がすぎましたので今日は、これで終わります。ありがとうございました。